

転生しました、  
脳筋聖女です

## 幼い頃のアンジェラ&ジュード



## ????

謎の騎士。益荒男と呼ばれる精悍な顔立ちと、2メートルをゆうに超える巨躯を持つ。果たしてその正体は——？

## ダレン

攻略対象の一人で、近衛騎士。軽そうに見えるが王子付きのエリートで、諜報系の任務が得意。

## エルドレッド

攻略対象の一人で、ウィッシュボーン王国の王子。魔物の調査・討伐部隊を作るため、アンジェラたちを招集した。

## ウィリアム

攻略対象の一人で、魔術師。強大な魔力を持つが、根暗でコミュ障な性格。目を前髪で隠している。

## ノア

攻略対象の一人で、『月の賢者』と呼ばれるエルフ。魔力と智力、誰もが惚れる美貌を併せ持つ。

## アンジェラ

アクション系乙女ゲームの世界に転生した、元廃人プレイヤー。物理攻撃の苦手な聖女タイプだが、重い武器をふり回して戦うことを夢見ている。

## ジュード

乙女ゲームの攻略対象の一人で、アンジェラの幼馴染。先祖代々彼女の家に仕えており、アンジェラを心配&溺愛している。

## 登場人物紹介

Characters Introduction

## 目次

転生しました、脳筋聖女です

7

STAGE 1 脳筋が転生したようです

8

STAGE 2 脳筋は日々育っています

39

STAGE 3 脳筋が聖女と呼ばれる日

60

STAGE 4 脳筋聖女の出陣

95

STAGE 5 脳筋聖女と王都の戦い

138

STAGE 6 脳筋聖女と王都の戦いII

219

番外編 EXSTAGE ELDRÉD

273

転生しました、  
脳筋聖女です

STAGE 1 脳筋が転生しようです

その日、ウィッシュボーン王国ハイクラウズ伯爵領を治める、ローズヴェルト家の屋敷内は、静寂と深い悲しみに包まれていた。

領主の大事な大事な宝物である一人娘が、生死の境を彷徨うほどの高熱に倒れてしまったのだ。家族と使用人たちが見守る中、腕が良いと評判の医師も、原因不明の症状にただただ首を横にふることしかできない。

——恐らくは、今夜が山でしょう。老いて乾いた唇が、悔しそうに告げた。

「ああ、どうして……どうして私たちのアンジェラが……っ!!」

若く美しい容貌を歪ませながら、伯爵夫人が膝から崩れ落ちる。もはや涸れたと思っていた涙も、大きな粒となって絨毯に染みを残していく。

国教の敬虔な信徒としても知られる伯爵は、幼い娘が倒れてからずっと、寝食も忘れてただひたすらに祈りを捧げ続けていた。

どうか、どうか、娘をお助け下さい。そのためならば、私たちはなんでもいたします、と。

——さて、家族がそんな悲しみに包まれている中、当の一人娘アンジェラがどうしていたかと言えば……夢の中で本来ありえないはずの『記憶』との対面を果たしていた。

人によつては『黒歴史』と呼び、数多の物語で『お約束』として出てくるそれは、すなわち。

(……嘘でしょ？ ここ、乙女ゲームの世界じゃない)

——そう、前世の記憶との邂逅、である。

男もすなる異世界転生といふものを女もしてみむとするなり。

今世の名はアンジェラ・ローズヴェルト。御年五歳。どうやら、アクション系乙女ゲームの世界に転生して、かつての私……日本人だった時の記憶を取り戻してしまったようですよ。

(いやあ、本当にあるのね。『乙女ゲーム転生』って)

そのテの話は小説やマンガなどでも人気があったし、かつての私も読んでいたような気がしなくもない。しかし、それがまさか自分の身に起ころうとは、夢にも思わなかったわ。

異世界に転生するような人間は、大抵前世でイレギュラーな死に方をしているものだ。今の私は覚えていないけど、きっとその死への対価がこの『アンジェラ』としての人生なのだろう。そう思えばなんとなく得した気がするし、これからの人生に光明が見えそうな気もするわ。

(……しかし。よりにもよって、このゲームの世界に転生しちゃうとはね)

体の感覚は曖昧<sup>あいまい</sup>だけど、周囲を流れていくゲームの情報にはひどく懐かしさを覚える。ついでに言うなら、溢<sup>あふ</sup>れんばかりの愛<sup>いと</sup>しさも。

前世の私が愛したこの作品、実は『乙女ゲーム』と呼ぶには少々異色のものだった。というのも、アクションゲームの大御所として名高いとあるメーカーが、半ばお試<sup>なか</sup>しのように世に出したものだ。

恋愛要素はかなり薄めで、シナリオの評価もいまいち。逆に、主人公を操作して戦うアクション部分は非常に高評価という、ややカテゴリーエラーな作品だった。かつての私も、そのアクション部分に「のみ」惚れ込んでいたプレイヤーだったんだけどね。

操作できる主人公は二人いて、『前衛系の女騎士』と『後衛系の聖女』のどちらかを選べる。攻略対象であり、共に戦う男性キャラクターは全部で八人。

その中から三人を選んで四人でパーティーを組み、各ダンジョンを攻略していく三人称視点のアクションである。

(それにしても、前世の私はあの作品を随分とやり込んでいたようね)

私が選んだ主人公は女騎士のほうで、レベルはもちろん最高値。装備は全て最高レアリティ品でがっちり固め、女だてらに大剣を担<sup>か</sup>いで戦っていた。もし彼女が実在したなら、女騎士ではなくメスゴリラかメスオークと呼んだ方が相応<sup>ふさわ</sup>しいようなガチの戦闘屋だ。

そんな彼女とパーティーを組む攻略対象は魔法使いなどの後衛職のみ。肉壁<sup>たて</sup>とアタッカーの両方

をこなす主人公に守られていた男たちは、きっと恋愛とかどうでもよくなったんじゃないだろうか。むしろ、あれだけ装備をそろえれば彼女一人で世界も救えただろう。

(そりゃあ恋愛シナリオも薄くなるわよ。だって主人公はゴリラだもの)

いくら二次元のイケメンとて、ゴリラに甘い言葉を囁<sup>ささ</sup>けるようなメンタルは持ち合わせていないだろう。あつたらあつたで、趣味を疑いたいところだけど。

ともあれ、周囲を流れる情報を見るだけでも『廃人』と呼べるほどの凄<sup>すさま</sup>じいやり込み具合だ。かつての私がこの作品を愛していたのは、痛いほどに伝わった。

それだけ愛と情熱を傾けていた世界に転生できたとなれば、どんなチート転生者にだって自慢できる最高の幸運だろう。

(ふっふっふ……今世の私は勝ち組確定ね！)

日常生活の記憶は全くないくせに、このゲームに関する情報だけは頭にインプットされ続けている。ギミックを知り尽くした戦場など、もはや恐れる必要はない。

神は私に、英雄になれと言っているのだ——!!

——と、盛大な勝ち組宣言をしようとして………神の犯したミスに、気がついてしまった。それはもう、たいっつっへん致命的なミスに。

私の今の名前は『アンジェラ・ローズヴェルト』である。

けれど、記憶の中のメスゴリラ……もとい、かつて使い込んだ前衛主人公の名前は——

「……ディアナ？」

そう、月の女神を由来とする彼女の公式名はディアナ。

では、アンジェラとは誰だ？ 天使の意味を持つ、この名前を与えられていたのは？

「……………アンジェラって……まさか、後衛主人公のこと!？」

あの作品で操作できる主人公は二人いた。

私が極めたガチムチ脳筋メスゴリラのディアナと、攻撃が苦手な回復特化の聖女——かつての私が一度たりとも使ったことのない、アンジェラという主人公が。

やがて高熱から奇跡的な生還を遂げ、周囲からの祝福の声が飛び交う中、私が『私』になって初めて発した言葉は、

「……転生人生詰んだ」

であった。

\* \* \*

「……参ったなあ。せつかくの転生人生なのに、まるつきり理想と逆だわ」

窓から差し込む日差しが心地よい、うららかな午後ひるごころの一時。暖色系の調度品でまとめられた、幼

女に与えられるにはあまりにも広い自室にて、私は深くため息をつく。

——前世の記憶との邂逅かいこうから、早数日はやかずが経った。

あの日、プレイヤーだった記憶を取り戻した私は『かつての私』と完全な同化を果たしたらしく、考え方もすっかり変わってしまった。

それまでの大人しい伯爵令嬢から一転、脳みそまで筋肉でできているような短絡的思考の持ち主……略して『脳筋』になってしまったのだ。座右ざゆうの銘めいは、困まどったらとりあえず殴なぐれ、である。

しかし、今世の私の容姿は、典型的な優はかな美少女だ。

透けるような真っ白な肌に、さらさらな亜麻色の長い髪。サファイアのような青く澄んだ瞳には、長いまつ毛が影を落としている。

こんな壊れ物のように美しいお嬢様に、荒事あらしじは似つかわしくない。

(外見がきれいなのは別に嫌じゃないのよ。五歳でこれだけキラキラ美少女なんだから、将来は絶世の美女確定だろうし)

だが残念ながら、外見の美しさは戦闘には必要ない。かつて操っていた主人公・ディアナがそうしていたように、私も巨大な剣をふるって戦場を駆け巡るつもりだったのだから。

「恋愛要素？ そんなものは知らんよ」と苦笑を浮かべて去り行くような、ガチムチゴリラになリたかった。……いや、なれるだけの根性は今も持っているのだ。

——問題は、それを実行する肉体のほう。

「……なんて華奢な体かしら。これぞ正しく『パーティーの一番後ろの回復要員』って感じよね」私の体は、それはもう華奢で細い。四肢は小枝のようにヒョロヒョロで、もちろんかすり傷一つついていない。こんな細腕では、大剣を担ぐなんて夢のまた夢。短剣どころか食卓でナイフを握るだけでも危なっかしいぐらいだ。

（私もディアナのように男たちを押しつけて、最前線で戦いたかったのに！ 色々特典をくれるのはありがたいけど、そうじゃないのよ神様！）

贅沢すぎる悩みとはわかっていても、どうしても文句が言いたくなってしまう。

実は私、このきれいな外見の他にも、神からの祝福“を沢山受けているのだ。

これは前世の記憶を取り戻す前に調べてもらったことなのだけど、この小さな体には膨大な魔力が備わっているらしい。普通の人間ではまずありえない……それこそ、チートとしか言いようがない量の魔力が。

記憶を取り戻した今ならわかる。これが俗に言う『転生者特典』なのだろう。

生家は伯爵位を賜る貴族で、先祖代々国教の敬虔な信徒でもある。そこに生まれたトンデモ魔力持ち、かつ容姿も美しい私を、『神の愛し子』なんて呼ぶ人がいたぐらいだ。

今回、瀕死の状態から生還したことが広まれば、評判はますます良くなるかもしれない。つまり、この歳でもう将来の栄光が約束されているのだけど……そういうのを望んでいたわけじゃないのよね！

「だいたい、記憶を思い出すきっかけが高熱っていうのもよくないわ。ショック療法みたいなものなのだろうけど、本当に死にかけるとかさ……」

私が今の私として目覚めたあの日、体のほうは生死の境を彷徨うほどの状態だったと聞いて、目玉が飛び出るぐらいに驚いた。神様つてば、ちよつとやりすぎじゃない？

前世の私は、どんな死に方をしたんだっけ——いや、考えるのはやめよう。覚えていないということは、忘れたかった可能性が高いもの。

とにかく、あの高熱のせいで両親や使用人はずいぶんと心配性になってしまい、私がどこへ行くにも必ずお供がついてくる。元々体は強くなかったし、貴族の娘なら当然といえば当然だけど、それにしたって過保護すぎるのよね。

「……………今日もいるわよねえ」

ちら、と視線を背後へ向ければ、すぐ見える位置に誰かが必ず控えている。私が少しふり返るだけで『ご用ですか、お嬢様！』と即座に目を光らせる使用人が、酷い時には五人ぐらい控えていたりするのだから、勘弁して欲しいわ。

「自室で大人しくしていてもこれじゃ、体を鍛えるなんて無理よねえ……」

こっそり外出なんてまずできないし、部屋の中で筋トレをしても、当然止められるだろう。恵まれた環境だとわかっていても、ついため息がこぼれてしまう。

……かつての私は、あのゲームを愛していた。そして今の私も、あの脳筋プレイを再現したいと



強く思っている。

前世の記憶から得た情報を試したい。そして、戦場を駆け抜きたい。欲求は尽きないけど、現実は無情だ。

「こうなったらいつそ、魔法職を極めるべきか……でも私、攻撃魔法は使えないのよね」

超攻撃型だったディアナに対して、アンジェラは回復などに特化した完全なサポートキャラだった。それは今の私も同様で、この国の赤ん坊が皆受ける教会の魔力適性検査でも『神聖魔法』に向いていると診断された。

神聖魔法とは、神様から特別に力を借りて行う奇跡の魔法であり、癒しの効果がある。反面、今の私に攻撃スキルは全くない。この辺りも悲しいかな、ゲーム通りのようだ。

「……サポートだって大事な仕事というのは、わかっているつもりよ」

一口にサポートと言っても種類は豊富だ。味方の強化や敵の弱体化はもちろん、索敵したり宝箱の封印を解いたりするものも全てサポートになる。

攻撃専門だったかつての私も、その技術には大変お世話になったからね。

それに、アンジェラには『回復魔法』という極めて重要な役割がある。回復用のアイテムはこの世界にも売っているだろうけど、あんなものを大量に使っても平気だったのは、あくまでゲームキャラであり『データ上の存在』だったからだ。

ちゃんと内臓が入った生身の人間に、アイテムがぶ飲みなんて無茶を強いことはできない。下

手をしたら、体を壊して死んでしまうわよ。

よってサポートキャラは、とても大事な役割を持つ。わかっているけど——それでも、何ごとにも性格との相性があると思うのだ。

「私じゃ、うまくできる気がしないのよね、サポート役」

考えることは苦手だし、敵を見たらすぐ戦いたくなる。そんな脳筋女に、パーティーの生命線でもあるサポート役を任せてもらってよいものか。……いや、だめだろう。私が他のメンバーだったら嫌だ。

「……神様は、どうして私をこの立場に転生させたのかしら」

答えが返ってこないとわかっていても、どうしても聞きたくなってしまう。

もし間違えたというのなら、神よ、今からでも遅くはない。女騎士のほうにチェンジしてくれれば、私は喜んでメスゴリラになろう！

あるいは前世の記憶を忘れたままなら、アンジェラは清く正しい『聖女様』にちゃんと育ったかもしれないのに。何故こんな脳筋な記憶を思い出させてしまったのか。

—— 答えは、神のみぞ知る。

「……でもアンジェラの役割を捨ててしまったら、多分私はメンバーに選ばれなくなるわ。ゲームで聖女アンジェラに求められていたのは、戦闘技術じゃなくてサポートだもの」

ゲームで主人公二人と攻略対象八人が所属していたのは、このウィッシュボーン王国の第三王子

が各地から有能な人物を集めた、魔物の調査・討伐部隊だった。

アンジェラも優れた神聖魔法の使い手だったからこそ、そこに加わることができたのだ。その適性を捨ててしまえば、きっとサポート役には別の人間が選ばれ、私はただの伯爵令嬢として一生を終えるだろう。いずれ誰かと結婚して子を産んで……ただただ平穏な人生を送ることになる。

「それじゃあ、なんのためにこの世界に転生したって言うのよ!？」

その生き方を否定はしないけど、記憶を取り戻した私は、もうただの伯爵令嬢じゃない。

戦場の地形や敵のステータスなど、必ず役に立つ情報が私の中にはたっぷりとつまっている。これを何にも使うことなく死んだら、転生した意味がないじゃない。

かつての興奮を、今世では生身で感じられるのに！ この世界の全てを見られるのに!!

「——あ」

その瞬間。それは天啓のように、ふっと私の頭の中に浮かんだ。

詰んだと思っていた人生の要素が、別の要素と結びつき——私の求める主人公像を導き出す。

……そう、確か有名なのは、とあるオンラインゲームのプレイヤーたちだ。

人は彼らのような存在を『殴り聖職者』と呼んでいた。

\* \* \*

「お父様、お母様。私に魔法を学ばせて下さい」

翌朝、多忙な両親が珍しくそろった朝食の席で、私ははつきりとそう口にした。

歳の割にはワガママを言わない娘の『おねだり』に、彼らは一瞬喜んだものの、すぐに困ったような表情へと変わる。

何せ、まだ五歳の子どもだ。淑女としての教養を学ぶならまだしも、『魔法』などという貴族に

はあまり関係のない分野に手を出すには早すぎる——声にはしなかったけれど、両親の表情は雄弁に物語っていた。

しかし、私にとっては一日でも早く習得しなければならぬものだ。美しい顔を困惑の色に染めた彼らに、私はなるべく堅苦しく聞こえるよう、とっておきの言葉を告げた。

「主より、天啓を賜ったのです。来るべき時に、私の力が必要になると」

次の瞬間、ガタンと大きな音を立てて両親は立ち上がった。

困惑していたのが嘘のように、満面の笑みを浮かべる二人の目には、歓喜の涙がにじんでいる。主とはすなわち神様のことで、一神教を国教とするこの国では唯一無二の存在である。そして、敬虔な信徒である私の両親は、その存在にめっっぽう弱い。

……いや、別に嘘を言って騙しているわけじゃないのよ？ 本当に私、神様から多大な加護をもたらったわけだし。後々この力で大活躍する予定だし。

「お父様、お母様。どうか、お許しただけませんか？」

「もちろんだよ、私たちの可愛い娘！ お前は本当に、我がローズヴェルト家の誇りだ！ すぐに専門の書物と教師を手配しよう！」

一応遠慮がちに言ってみれば、結果は予想通りの好感触。父は食事もそこそこに、リビングから駆け出してしまった。

……ちよつと先走りすぎている気もするけど、仮にも伯爵を名乗る人だもの。これは期待ができそうだけ。

（これで魔法を学ぶ環境はなんとかかなりそうね。あとは私の努力次第よ）

父を追うように慌しく動き始めた使用人たちを目で追いながら、脳筋な聖女としての第一歩を踏み出せたことに、私はこっそりと笑った。

さて、ここで一つ弁明しておきたいのだけど、脳筋とは『頭が悪い人』のことではない。『頭を使うのが面倒な人』のことである。ただし、頭突きのような物理的な使い方は別ね。

何か難しい問題が起こった時に、話についていけないのが頭が悪い人であり、「めんどくせえ！ とりあえず殴ろう！」という短絡的な答えを出すのが脳筋だ。

……何が言いたいのかって？ 私は脳筋だけど、本や勉強が嫌いではないってことよ。

このアンジェラ、齢五つにしてすでに文字の読み書きができるのよね！ ……まあ、貴族の令嬢なら当たり前で教養なのかもしれないけど、それなりに優秀ではあるのよ。

食事を終えた私は、父の執事によって屋敷の蔵書室へと連れてこられていた。

部屋の中央にはやたら立派な櫛の長机と、座面にビロードを張った高そうな椅子が鎮座している。そして机には、ひとまずこの屋敷にある分だけの魔法書が積まれていた。どれもこれも、辞書のような分厚い本だ。

……うちの両親、本気出しすぎよ。もともとこれだけの蔵書があったのなら、わざわざ頼む必要はなかったかもしれない。

「と、とにかく、目当てのものは手に入ったわ。これで魔法が習得できるわね。えーと、強化魔法のページはどこかしら……」

一冊でも私の細腕で抱えるにはかなり厳しい重さだけど、内容は実に興味深い。ええ、こんな難しい文章も読めるわよ！ 記憶を取り戻す前のアンジェラなら童話集が関の山だったけど、前世の私は攻略本も設定資料集もノベライズも読破していたからね。

……さて、魔法を学ぶと決めたのは、決してサポート役の運命を受け入れたからではない。いかにもな聖女様ではなく、私らしい『アンジェラ』になるための答え。それが、サポート魔法を学ぶことにあると、先人の知恵によって気付けたのだ。

殴り聖職者。これは、とある有名なオンラインゲームのプレイヤーの呼称である。

回復やサポートを専門とする後衛職を選びつつも、ソロプレイ……つまり守ってくれる仲間なしでダンジョン制覇をしていた猛者たちだ。

普通に考えればありえない。後衛職はパーティの一番後ろで守られながら、仲間を生かすのが仕事なのだから。しかし彼らは「ぼっちプレイ」の底力を見せてくれた。

「本来、仲間にかけるはずの強化魔法を自分にかけて戦うなんて、よく考えたわよねえ」

別にそこまでなくても、仲間を集めればよかつただろうに。彼らが孤高のプレイにどんな価値を見出していたのかは、今の私にはわからない。

けど、その先人の知恵こそが、今の私にとって最良の選択であることは確かだ。

幸いにも、私の魔力は溢れんばかりに豊富。筋力強化の魔法を究めれば、この細腕で重たい武器をふり回すこともきつと夢じゃない！

最前線に立って戦いながら、味方の回復もできる聖女様だなんて、素晴らしいじゃない！

「ふふふつ、チート上等よ！ この私が、全ての敵を薙ぎ払ってみせる!!」

ともすれば悪役めいた高笑いでもしてしまいそうな高揚感。魔法の勉強を許可された時点で、もうこの人生は勝ったも同然だわ!!

待つてなさいダンジョン！ 待つてなさいボスマンスター!! 最高の敗北をくれてやろうじゃないの!!

こぼれそうな笑いを無理矢理押し込めつつ、分厚い書物を舐めるようにじつくりと読んでいく。さすがに五歳児の頭には難しい言い回しが多いけど、理解できないわけではない。一文一文を頭に刻むように、神経を集中していく。

—— ゆえに、気付くのが遅れてしまった。

「……アンジェラは、なんだか雰囲気が変わったね」

「——ツツ!?」

おっとりというか、のんびりというか。そんな表現が似合いそうな優しい声で呼ばれて、魔法書にのめり込んでいた私はビクッと肩を震わせた。

ちやうど私の背後、少しだけ開いた扉の隙間から、一對の瞳が遠慮がちにこちらを見つめている。真つ黒なその目は、私の家族のものではない。

「あ、ごめん。驚かせちゃったかな」

目が合ったことに気付いたその人物が、ゆっくりと室内へ入ってくる。

仕立ての良い白のシャツとサスペンダー付きのハーフパンツという、いかにも良家のお坊ちゃんなスタイルで現れたのは、私とそう歳の変わらなそうな少年だった。

「——あ」

その姿に、私ははっと息を呑む。……同時に、失敗したと思った。

記憶を取り戻す前のアンジェラなら、ここはにこやかに笑って彼を迎えるところだったから。

「……ジュード」

恐る恐る名前を口にした私に、少年は困ったように微笑んでくれる。

……ああ、やっぱり私は考えが少し足りないらしい。強くなることばかり考えていて、ここが一



応『乙女ゲームの世界』だってことをすっかり忘れていたわ。

——ジュード・オルグレン。彼は、攻略対象だ。

ダブル主人公モノの恋愛ゲームといえば、わかる人にはわかるだろう。男性向け女性向け問わず、これには必ず『特別なキャラクター』がいる。

それは、「片方の主人公でしか攻略できないキャラクター」だ。

どちらの主人公も使ってもらえるようにと開発者が仕込むもので、隠しキャラだったり真相解明ルートのキャラだったり、その存在は大抵が重要だ。

この世界の元となっているゲームにも、もちろんそうしたキャラはいた。なので、攻略対象は八人いるけど、一方の主人公で攻略できるのは七人になる。ディアナの専用キャラをアンジェラで攻略することはできないし、逆もしかりだからね。

ただ、パーティーメンバーとしては選択できるので、絶対に攻略できないキャラと一緒に戦う人もいられる。主人公の浮気防止に入れるのもアリだ。

ディアナとアンジェラの専用キャラには共通点があり、それはお互いの『幼馴染』だということ。ジュード少年も私の幼馴染で、彼こそがゲームにおけるアンジェラ専用の攻略対象だった。

(すっかり忘れてたわ。彼とパーティーを組んだこともほとんどなかったしね)

乙女ゲームではお目当てのキャラの『好感度』を上げることで、そのキャラと親密になっていくわけだけど、専用キヤラは好感度が上がりやすく、パーティーも組みやすいように作られていた。よって、後衛のアンジェラと組むジュードはバリバリの前衛剣士。けれどディアナしか使っていなかった私は、役割がかぶるキヤラとはあまり組まなかったため、彼の情報は本当に乏しい。

(オール前衛パーティーなんて、力づくで戦う強行ダンジョンでしかやらないものね)

そもそも乙女ゲームに強行突破するようなダンジョンがある時点でおかしいけど、まあ今更だ。

とにかく、目の前の彼は重要人物なのだけど、記憶が戻る前のおぼろげな思い出と、取り扱いは明書に載っていた簡単な紹介文しか私は知らない。これは非常に困った事態だ。

そもそも、私が今の私になった時点で、恋愛を楽しむ予定はなかったのだ。敵やダンジョンの情報も、私が今の私になった時点で、彼らとのイベントなんて全く記憶にないもの。

(ああでも、このすぐくわかりやすい容姿は攻略対象ならではね)

さすがは恋する乙女のお相手。彼は十に満たないであろう年齢で、すでに世の男性にケンカを売れるレベルで整った容貌をしている。顔立ちはややキツイものの、涼やかな目元にスツと筋の通った鼻。各パーツの配置も実に絶妙で、動いていなければ美術品として楽しめるほどだ。

しかし、ジュードについて特筆するべきなのは、美しい顔よりもその色合いだろう。

色素の薄い白色人種がほとんどのこの国において、彼の肌は浅黒い。短い髪も目と同様に墨で塗ったような黒色をしている。真っ白な私と並べば、その黒さはますます際立つはずだ。

(えっと……確か彼は、この国の人間ではなかったわよね)

オルグレン一族は別の国の剣士の血筋で、この国に来て困っていたところをうちの先祖が助けたらしい。詳しくは知らないけど、恩義を感じた彼らはそれからずっとこの伯爵家に仕えてくれている。私を蔵書室へ案内してくれた執事が、ジュードの父親だ。

(ゲームではジュードと同じ部隊に入っていたし、きつと付き合いは長くなるわよね。前世の記憶を思い出してから、転生後の記憶がどうも曖昧なだけで、「なんにも覚えてないの、ごめんね☆」じゃあ、あまりにも印象が悪いわ)

彼との間に恋が芽生える予定はないけど、今後も付き合っていくのなら人間関係は良いに越したことはない。さて、どう対応するべきか。

私がつらつらと考えごとをしている間、ジュードは文句を言うこともなく私を見つめていた。どこか寂しげな苦笑を浮かべて。そういえば『私の雰囲気が変わった』とか言っていたような。

「……………ジュードは、今の私が嫌い？」

特に話したいことも思いつかなかったので質問してみると、彼は外見よりもずいぶん大人びた仕草で、ゆるく首を横にふった。

「ぼくがアンジェラをいやだと思っわけがない」

「じゃあ、どうして寂しそうな顔をしているのかしら？」

私は逆に可愛らしさと幼さを意識しながら、小さく首をかしげてみる。するとジュードは私の顔

と机に積み上げられた本を交互に見て……ゆっくりと目を閉じた。

「神さまは、どうしてアンジェラにはかりいじわるをするのかと思うと、かなしかっただけだよ」  
「……………は？」

うっかりお嬢様の仮面が剥がれかかった私に、小さな攻略対象は唇だけの笑みを浮かべる。

……どういふこと？ 私はむしろ、神様から加護をもらっているのに、いじわるをされていると思われていたの？ そう見える要素が一体どこにあるの？

（まさか、腕立ても腹筋もまともにできない筋力のなさのこと!? それとも、階段の上り下りだけで息が上がる体力のなさのこと!? 貴族令嬢なら普通だと思っていたんだけど、これは神様からのいじめだったの!?)

筋肉の「き」の字もない細い体も、日焼けを知らない真っ白な肌も、まさかいじめだったのか!? 衝撃の事実にうろたえる私を見て、ジュードは少し驚いているようだ。

「えっと、ごめん。そんなにおどろかせるつもりはなかったんだけど」

「驚くに決まっているじゃない。神様は私を守って下さっているのよ？ その方が、いじわるだなんで……ねえ、私ってどこか変？ いじめられているように見える？ 体が弱いから？ 細かいから？ それとも……」

「そ、そういうことじゃないよ。アンジェラはたしかに細いけど、女の子だからしかたないし。そういうことじゃなくてさ……」

慰めるように私の頭を撫でながら、ジュードは机の上の魔法書を見つめている。まるで、それが良くないものだと責めるような、冷たい眼差しで。

「……魔法に興味があるのなら貸すけど、少し待ってくれる？ 私もまだ読めていないから」

「いや、いらないよ。ぼくはマホウもマジックもつかえないって言われているし」

大事な教材を変な目で見られたせい、思わず低い声で答えてしまった私に、ジュードはまた困ったように笑っている。

興味がないのなら、何故見つめていたのかしら。この分厚い本は私のこれからの人生を決める、大事なアイテムなのよ？ 上手く使えば、鈍器にもなりそうだし。

ちよつと拗ねたような表情を作って、彼をじつと見つめる。ほとんど身長差がないので、顔はすぐ近くだ。……その顔が『形だけの笑みを貼り付けたもの』だということもよくわかる。歳の割には、かなり大人びた少年みたいね。

——そんなこんなで、ジュードと見つめ合うこと十数秒。

彼は観念したかのように、くしゃつと表情を崩した。それこそ拗ねたような、不満を表す顔になる。

「……神さまはいじわるだよ。ずっとがんばってきたアンジェラに、またこんなにたくさんべんきょうをさせるなんて。ほかの子たちは、みんなまだべんきょうなんかしないであそんでいるのに」

「……………そうだったかしら？」

私の予想とはずいぶん違う答えが返ってきて、ちょっと驚いてしまった。つまりジュードは、私が勉強していることを『神様のいじわる』だと思っていたのだ。

(そりゃあ平民と比べれば、私は厳しい英才教育を受けているわ。これでも伯爵家の一人娘だもの。そんなの当然じゃない)

この国の識字率がいかほどかは知らないけど、少なくとも私は読み書きと一般教養、公的な場での立ち居ふるまいを習得済みだ。だが、こんなものは貴族の子なら誰でも習っているだろう。

社交界デビューはまだ遠いとはいえ、お茶会なんかに関われることもあるんだし。当然の教養をいじわるだなんて言われても困る。

「私なんて大したことはしていないわ。これぐらい、誰でもやっていることでしょう？」

「たいしたことあるよ!! 父さんにきいたけど、今のハクシヤクさまがよみかきできるようになったのは、七さいのときだって。アンジェラはあたまがいいし、がんばりやさんですごいって、やしきのみんながほめていたよ！」

「そ、そうなの？ ありがとう」

どうやら私は早熟な子だったらしい。前世の記憶のおかげかと思っていたら、記憶を取り戻す前から優秀だったのね。ちょっと恥ずかしいけど、褒められればもちろん嬉しいわ。

「……君はすごいんだよ、アンジェラ」

ジュードは褐色の肌を上気させながら、子どもらしい必死な様子で私に詰め寄ってくる。ただでさえ近かった距離が、もう額がくつくぐぐらいいだ。……さすがに近すぎだよ、少年。イケメンだからってセクハラを許すほど、私は優しくないわよ。

「ジュード、ちょっと近すぎない？」

「アンジェラ……さみしいよ。せつかくアンジェラの習いごとがへったのに、こんどはマホウのベんきょうだなんて。やっとアンジェラとあそべると思ったのに。やっぱり神さまはいじわるだよ」  
こらジュード少年、言葉に気をつける。神様を侮辱すると、うちの両親が怒るわよ。

……それは、ともかくとして。ジュードはどうも私と遊びたくて拗ねていたらしい。男女では遊び方も違うと思うんだけど、彼はおままごとにつき合ってくれるタイプの男の子なのかしら。

(彼は六、七歳ぐらいよね。いくら使用人の子とはいえ、外で友達ぐらいいは作ってもよさそうなものだけ。女の私と遊びたいなんて、何か理由があるのかしら)

記憶を探っても、彼の情報はゲームのものしか思い出せない。彼のほうから近付いてきてくれたのだから、交流はしておいたほうが良いと思うけど。でも、魔法書を読む時間は削りたくないのよね。

「……えっと、あのねジュード。これは決して神様から命じられたことではないの。私が自分の意思でやろうと決めたことなのよ」

「……わかってるよ。アンジェラはいつだってそうだ。みんなのために、がんばってる」



「そんなことはないわよ。私はきつと、自分勝手でわがままな娘だわ」  
悲しげに俯いたジュードに、ゆるく首を横にふってみせる。一歩間違えたら頭突きをしそうだから離れて欲しいのだけど、相変わらず彼はびったりと寄り添ったままだ。

仕方がないのでその手をとって、なるべく優しい笑顔を作ってみる。

「私は弱いわ。この間の高熱もそうだけど、とてももろい体をしているの。神様はそんな私に、道しるべを示して下さっただけなのよ。こんな私でも世界や皆のお役に立てるようになってね」

正しくは、道を示してくれたのは廃人ブレイヤーの皆さんたちなんだけどね。いかにも聖女っぽい理由を告げると、ジュードの眉間に皺が刻まれていく。

「私、弱いのは嫌よ。皆に迷惑をかけるのも嫌。強くなりたい。大切な人を守る私になりたい。……お願い、わかっただけでジュード。この勉強は、私にとつてとても大切なものなの」

「だけど……やっぱ好きみたい。ねえアンジェラ、ぼくとあそぶのはいやなの？」

なんとか説得を試みたものの、彼の目にじわじわと涙がにじんでできてしまった。……これじゃあ、私が幼馴染をいじめているみたいじゃないか。

色恋は別として、私は彼が嫌いなわけじゃない。魔法の勉強をしている間は邪魔をしないで欲しいだけで、それ以外はむしろ仲良くしておきたいのに。

(……ああ、そっか。私たち、まだ子どもだったわね)

考えてみたら、私たちはまだ齡一桁なのだ。説得なんて通じなくて当たり前ね。だって相手は子

どもだもの。わかってもらいたいなら、やり方を変えないと。

「それならジュード、勉強が一区切りついたら私と遊んでくれる？ 勉強も大事だけど、私は丈夫な体も欲しいの。だから、かけっこや鬼ごっこがしたいわ」

「かけっこ？ ぼくはもちろんいいけど、アンジェラは走ってだいじょうぶなの？ くるしくなったりしない？」

「最初は苦しいかもしれないわ。足も遅いと思う。だから練習をしたいの。ダメかしら？」

説得ではなく提案した私に、ジュードは顔をパッと輝かせて嬉しそうに頷いた。だから頭突きしちゃうから！ 距離をとって少年！

しかし、我ながら名案だと思う。一人では準備運動すらままならない私だけど、いずれは腕利きの剣士になるはずの彼が一緒なら、いいトレーニングになるだろう。

虚弱体質のままでは、いくら強化魔法を覚えたとしても、まず外へ出してもらえないからね。せめて階段ぐらいいは楽に上り下りできる基礎体力が欲しい。

「ありがとう、ジュード。いじわるを言ってごめんね」

「ぼくも、ごめんなさい。アンジェラががんばるのなら、ちゃんとおうえんしてるよ」

作り笑いではなく心からの笑顔を返せば、ジュードの頬がポツと赤く染まった。ずつとくつついて話していたのに、今更照れくさくなったのかしら。

小さい子は可愛いなあと思っていたら、ジュードは私の額に触れるだけのキスをしてから、逃げ

るように扉のほうへ駆けていく。

「べんきようがおわつたらよんでね！ ぼく、まってるから！」

「え、ええ。なるべく早く終わらせるわね」

予想外のチューに驚く私を残し、彼は元気に走り去っていった。……乙女ゲームの攻略対象って、幼少期からイケメン力がすごいのね。

「まあ、ジョギングの予定が組めたんだからよしとしよう。それにゲーム通りに進めば、いずれ一緒に戦うのだし、交流はしておかないと。さて、強化魔法の続き、と……」

こほんと咳払いで気持ちを切り替えてから、私はお預けを食らっていた魔法書に向き直る。体を強化するだけではなく、体力を増やせる魔法もどこかに載っていたらいいんだけど。

細かい文字を目で追いながら、理想のアンジェラ像を頭に浮かべる。

戦って回復もできる前衛聖女。その輝かしい未来へ向けて、まずは最初の一步を踏み出した。

\* \* \*

「……なんなの、これ」

あれからしばらく魔法書とにらめっこをしていたら、魔法の基礎はだいたい覚えられた。さすがに五歳児には難しい内容だったけど、充分すぎるほどの収穫があったと思う。

キリがよいところまで進んだので、息抜きも兼ねて蔵書室の本棚を眺めていたのだけ……そこで、ちょっと困ったものを見つけてしまった。

それは薄い紙の束。端がギザギザにやぶれているので、恐らくどこかの本から抜き取ったものと思われる。そこに刷られた大きなサイズの文字に、私は見覚えがあった。

「……これ、子ども向けの童話集の一部だわ。なんでこんなところに？」

記憶を取り戻す前の私も読んでいたはずなのに、欠けたページがあったとは気付かなかった。興味本位でその束の内容に目を通して——私は知らなかつた自分を心から後悔した。

それは一つの童話で、タイトルは『黒い悪魔のおはなし』。人をたぶらかす悪魔を英雄が退治する勸善懲惡モノなんだけど、その悪魔の描写がよろしくない。

“茶色い肌に黒い髪と黒い目の、それはそれは美しい悪魔”  
言うまでもなく、その容姿はつい先ほど会った私の幼馴染にぴったりと合致してしまう。その上、

この話は国教である神聖教会の経典が元だと書かれていたから、ますます驚いた。驚きのあまり、その束を持って使用人たちのもとへ聞き込みに走ってしまったほどだ。

……結果は予想通り。

この童話はとても有名な話らしく、ウィッシュボーン王国において悪魔というと“黒髪黒目で褐色肌の美しい者”を皆が思い浮かべるらしい。

そういえば、同じ特徴を持つジュードの父親は『かつて伯爵家が我らを助けたのも、悪魔を従属

「させるためだったのかもしれない」と笑って言っていた。いや、笑いごとじゃないよ執事！  
(ジュードが私と遊びたいと言った理由はこれね)

子どもは時にとても残酷な生き物だ。

多分、『悪魔』と呼ばれる彼と遊んでくれる子が誰もいなかったのだろう。両親が記憶を取り戻す前の私に童話を読ませなかったのも、きっと私がジュードを避けられないようにするためだ。

最初のきっかけはどうかあれ、オルグレン一族は我が家で虐げられることもなく、受け入れられている。敬虔な信徒である両親が受け入れているのだから、彼らが悪魔のはずがない。

「ジュード！」

聞き込みに走り回ったままの足で、私はジュードを捜していた。……あの童話を知った今、ちゃんと彼に会って話したいと思ったのだ。

「アンジェラ？ どうしたの。走ったらあぶないよ？」

使用人たちが寝泊まりする階へと下る階段の手前で、彼は花瓶の水を替えていた。日焼けとは違う褐色の肌に、さらりと滑る真っ黒な髪。少年らしからぬ美しさだけれど、この国では珍しい容姿に、胸が痛んだ。

「ジュード！ 私は貴方の味方だからね！ 誰がなんと言っても、貴方は大切な幼馴染よ！」

「え？ なにかあったの？」

倒れるように抱き着いた私を、ほぼ身長差のない彼が慌てて受け止めてくれる。子どもの少し高

い体温と、とくとくと脈打つ鼓動が心地よい。

何も知らなかった自分が悔しい。ジュードはきつと、私の知らないところで沢山悲しい思いをしたに違いないのだ。こんなヒヨロヒヨロの小枝のような私を頼りにしてくれるほどに。

「……ああ、そっか。アクマのはなし、アンジェラもやつとよんだんだね」

「ジュードは悪魔なんかじゃないわ。私は貴方の髪も肌の色も大好きなもの」

「ありがとう。でも、アクマだって言う人はたくさんいるから……もういいんだ。ぼくには、アンジェラがいてくれる」

「そうよ、私がいるわ。私が強くなって、貴方を守ってあげるからね！」

「それじゃあカッコわるいよ。ぼくもつよくなるよ。アンジェラをまもるために」

背中に回された小さな手が、私の子ども用ドレスの生地を強く握る。ゲームでは描かれなかった辛い思い出も、この世界ではただの『設定』では済まない。

たとえろくに覚えていなくても、彼が大事な幼馴染であるのは変わらない。世界を救う主人公の私が、幼馴染すら救えなくてどうするのよ。

「ずっと、そばにさせてね、アンジェラ」

「もちろんよ！ 一緒に強くなりましょうね！」

目の前に早速現れた苦難に、私の心はとでも高揚していた。魔物を退治して世界を救うという大きな目標の前に、強くなる理由を一つ手に入れたのだから。

——ゆえに、この時の私は知らないのだ。  
立てる予定のなかった恋愛フラグが、ここでもばっちり建設されていたのだと。

STAGE 2 脳筋は日々育っています

「大丈夫ですか、お嬢様？ 雑用でしたら、僕が運びますよ」  
心配そうに声をかけてくるジュードに、私はきっぱりと答える。

「平気よ。むしろ、これは私のための訓練なの。危なっかしく見えるだろうけど、見守っていてちょうだい」

乙女ゲームの記憶を取り戻してから、早くも二年が経過した。

元プレイヤーで転生者である私、アンジェラ・ローズヴェルトも、先日無事に七歳の誕生日を迎え、ますます魔力に磨きをかけておりますよ！

二年前から始めた勉強は続いており、魔法技術も着々と身につけてきている。神様を心から信仰している両親も、この二年間、非常に好意的に協力してくれたしね。

回復を中心とした『神聖魔法』は本当に私に合っていたらしい。まるでスポンジが水を吸うかのよう、あつと言う間に習得することができた。それが神様のくれたチートなのか、アンジェラという「キャラ」に備わっている特性なのかはわからないけど。

とにかく、今はほとんどの魔法を呪文の詠唱なしで使うことができるくらいだ。小さな切り傷は

もちろん、ねんざや骨折も治せることを用人たちで確認済みである。

……もちろんわざと怪我をさせたりはしてないわよ？ 庭の手入れや屋敷の掃除など、その大半を手作業で行っているこの世界では、仕事は怪我と隣り合わせなのだ。

でも回復魔法のおかげで、当家はずっと医者いらず。かつての私が生きていた日本と違って、この国では医療もそれほど発展していないため、それはもう重宝おもたげされていた。加護サマサマね！

そして、戦いの要かなめとなる『強化魔法』も、着々と身につけてきた。今はまだ回復魔法ほどは使いこなせないけど、それでも充分実用に足るものだと自負している。

今この瞬間も、自身にかけながら訓練をしているところだ。

(うんうん、この前よりもだいたい少ない魔力で使えるようになったわね)

臙脂色の絨毯が敷かれた広い廊下を、私は意気揚々と歩いている。この細い腕に、分厚い魔法書を五冊ほど重ねて。

自慢じゃないけど、相変わらず筋肉がつきにくい素の私では、魔法書五冊なんてとても持ち上げられない。そこで、魔法で筋力を強化しているのだ。少し前に試した時は三冊が限界だったけど、今日は五冊持っても安定して歩けているし、魔力の使用量も期待通りに抑えられている。

この調子で訓練を続ければ、もっと少ない魔力で使えるようになるだろう。最終的な目標は、鉄製の武器を持てるようになることだ。

(良い感じだわ。今日はこのまま屋敷内を一周して、体を慣らしておこう)

胸を弾ませながら、魔法書の表紙を撫でる。そうして隣を見ると——こちらを見つめている黒い瞳と目が合った。

「……そんなに頼りなく見えるかしら？ それとジュード、変な呼び方はやめてね」

「変って、お嬢様。これが正しい呼び方であって……」

「ジュード？」

「……………わかったよ、アンジェラ」

成長する私と共に、幼馴染のジュードもどんどん良い男に育ってきている。

同じぐらいだった身長は早くも差がついたし、肩幅や体つきも女の私とは違ってきた。きっともう何年か経てば、私はかなり上から見下ろされるようになるだろう。悔しいけど仕方ない。

また、最近はずっと丁寧な言葉遣いもするようになってきた。多分、彼の父や周りの人にそうしろと言われているのだろうけど、今更『使用人』ぶられても気持ちが悪いのよね。

いつかの約束通り、彼と私はずっと一緒に育ってきた。友として、幼馴染として。彼が鬼ごっこやかけっこに付き合ってくれたおかげで、私の体力も少しだけ増えたのだ。これからも仲間として、良好な関係を築いていきたいと思う。

「ねえ、せめて半分渡してくれない？ 別にアンジェラが頼りなく見えるわけじゃないけど、使用人の僕が手ぶらなのが申し訳ないんだ」

「ダメよ！ これは私のための訓練なの。もし我慢できなくなったらお願いするから、それまでは

見守って！」

「……なんの訓練なのかは知らないけど、あんまり無茶しないでよ？」

心配そうに見守りつつも、彼は昔から私の邪魔はしない。でも、何かあったらすぐに駆けつけられる距離にはいてくれる。こうしたさりげない優しさも、さすが乙女ゲームの攻略対象と言わべきかしらね。……攻略する気はないけど。

そんなやりとりをしていた時だ。廊下の向こう側から使用人の集団が歩いてくるのが目に入った。  
「……あら？」

先頭を歩くのは、私も付き合いの長い年配のメイド長だけど……その後ろをついてくるのは、真新しいお仕着せに身を包んだ若い女性たちだ。

「新人さんかしら？」

「ああ、つい最近雇われた人たちだね」

私の呟きにジュードが答えてくれる。我が家は貴族社会でも結構上位のほうらしく、他家と比べて使用人は多いはずなだけだ。さらに増やす必要があったとは知らなかったわ。

(こういう日常のイベントって、ゲームではなかったものね)

ぼんやりと眺めていれば、こちらに気付いたメイド長が慣れた動作で道を空けてくれた。あとに続く女性たちも慌てて頭を下げ、端に寄ってくれる。

「お疲れ様」

私は軽く挨拶の声をかけてから、ゆっくりと彼女たちに近付いていく。穏やかに微笑むメイド長と比べて、まだまだ新人さんたちの表情は硬い。

きっとそのうち紹介されるだろうなど、特に何も考えずに通りすぎようとして……

(……………うん?)

そのうちの一人に、妙な違和感を覚えた。

歳は二十に届くか届かないくらいだろうか。お辞儀の動作自体におかしな点はなかったのだけど……なんだか妙に“無駄がない”ように見えた。

「……アンジェラ？」

足を止めてしまった私に、ジュードが不思議そうに首をかしげる。

『頭を下げる』という相手に弱点をさらけ出すポーズをしているはずなのに、その女性には隙がないように見えるのだ。

雇い主の娘たる私が止まったことで、他の女性たちに明らかな緊張が走る。だが、件の女性だけは妙に落ち着いたまま微動だにしない。

そうして様子を窺っていたら、女性の頭上にぼんやりと『何か』が浮かんできた。

「……お嬢様？　どうかありませんでしたか？」

ジュードに続いてメイド長も質問してきたけど、私の目は女性の頭上に釘付けた。髪を押さえるホワイトブリムの上に、何かが“浮いている”のだ。

赤い色の——これは文字だろうか。

(人の頭上に文字なんて……他の人には見えていないのかしら?)

訝(いぶ)しむ彼らを見無視して、さらにじっと目をこらす。文字は文字でも、この世界の文字ではない。見なくなつて久しいこれは、もしかして『日本語』か。

(……うん、これ漢字だわ。なんでそんなものが見えるの?)

女性の頭上に浮かぶ、赤い色の日本語。そういえば、同じものをゲームでも見たわね。パズルのピースが急速に繋がつていって——目の前のそれが、私の中で意味を成す。

【暗殺者】と。

「敵じゃないの!!」

反射的に叫んだ瞬間、私は手に持つていた分厚(ぶあつ)い魔法書を彼女に投げつけていたのだった。

\* \* \*

その後、私が本をぶつけたメイドを調べてもらったところ、小型武器や怪しげな薬などが出てくる出てくる。脊髄(せきずい)反射で倒してしまつた彼女は、本当に暗殺者(あんころ)だつたようだ。

うちは勤続年数の長い使用人ばかりだつたせいか、新人に対する警戒心が薄れていたらしい。それにしてもさすがすぎるわ。今後は身体検査を強化してもらわないとね。

反省して深く頭を下げる使用人(しやうじん)たちを慰(なぐさ)めつつ、国の公安機関にしよつぱかれていくメイド……もとい暗殺者をジュードと並んで見送る。

あの暗殺者も、まさか齡(よね)七つの小娘に負けるとは思わなかつただろう。それも、ノックダウンさせられた武器は本である。

(……敵の情報が見えるなんて、さすがに思わなかつたわね)

敵キャラクターの名前は赤い文字で頭上に表示される。これはあのゲームの仕様だ。さすがに体力ゲージはなかつたけど、パツと見で相手が敵だとわかるなんてとても便利だ。わざわざ敵かどうか探る手間(まひま)が省(はぶ)ける。それに、敵ではない人を疑う必要もなくなるからね。

これも神様からの加護(かご)なのだとしたら、全力で感謝したいわ!

「……ねえアンジェラ。まさかこのために分厚(ぶあつ)い本を持つていたわけじゃないよね?」

こつそり神様へ感謝を送つていれば、ジュード(じゆうど)が訝(いぶ)しげに呟(つぶや)いた。

「まさか! 本を持つていたのは本当に偶然よ!」

いくら転生者の私でも、今回のことは想定外だ。だいたい、こうした分厚(ぶあつ)い本は投げるものではなく、殴るもの“だろう。今回は慌てて投げつけてしまつたけど、打撃武器として角を上手く使えば、もつとダメージを与えられたはずだわ。

「……そう、か。そうだね。変なことを聞いてごめん。君に怪我がなくてよかったよ」

ジュードの言葉はどこか歯切れが悪い。表情も少し落ち込んだ様子で、よかったと言っている割には暗い雰囲気だ。誰も怪我をしていないし、落ち込む理由はないはずなんだけど。

（まさか、これはイベントで、本当はジュードが倒すはずだったとか？ アンジェラ編は全く知らないから、普通に倒しちゃったわ。……恋愛イベントなら逃しても別に困らないけど）

ジュードのことは嫌いじゃないけど、彼と恋愛をするのはまた別の話だ。それに暗殺者なんて危険な人物を早めに追い出せたのだから、結果としては良いはずよね。

「ジュード？ 何か気になるの？」

「ああ、ごめん。なんでもないんだ」

一応確認してみたものの、彼は曖昧な笑みを浮かべるだけだ。

結局この日は『危ないから自室へ戻れ』という両親からの指示で、魔法の訓練を切り上げて部屋に戻るのだった。

\* \* \*

翌日、母の部屋へ招かれた私は、まさかの吉報に喜びの声を上げた。

「えっ、私にきょうだいですか!？」

私によく似た伯爵夫人は、とても子どもがいるようには見えない若くてきれいな女性だ。体つきも華奢で、今日も深緑色の普段着ドレスがよく似合っているのだけど、その細いお腹に赤ちゃんが入っているとは思いつかなかった。

（そっか、それで新しい使用人を雇っていたのね）

かつて私がいた日本とは違い、この世界は医療環境がそれほど整っているわけではない。回復魔法で怪我は治せるものの、出産となれば命がけの一大行事だ。

信頼できる古参の使用人は、これから母と赤ちゃんにつきっきりになるだろう。新人を雇うことになったのも納得だわ。おかげでうっかり暗殺者を呼び込んでしまったけど、被害はなかったし。何より家族が増えるのはめでたい話だ。

「弟でしょうか？ 妹でしょうか？」

「ふふ、さあどっちかしらね。きつと、どっちでも可愛いわ」

わくわくしながら身を乗り出す私に、ソファに腰かけた母は嬉しそうにお腹を撫でさせてくれた。まだなんにも感じないけど、この中に弟か妹がいるらしい。ゲームでは見たことがなかったアンジェラの家族は、今の私にとっては守りたいと願う大切な人たちだ。

（もっと強くならなくちゃね！ 生まれてくる赤ちゃんは、お姉ちゃんの私が守らないと。よし、今度の訓練は魔法書十冊に挑戦しようかな）

ますます輝きを増していく転生人生に、強くなるための新たな目標が追加された。もし次に暗殺



者なんか来て、今度は屋敷の敷地に入る前に撃退してやるわ。

戦う力も敵を見つける目も手に入れた。あとは私が頑張ればいいだけだ。

(そうと決まれば訓練訓練！ 今日足筋力を強化して、屋敷の外周をジョギングしようかな。一人だと怒られるから、ジュードを巻き込んで……)

「失礼します。お嬢様はこちらにいますか？」

うきうきしながら筋トレメニューを考えていれば、呼びに行く前にジュードのほうから来てくれたみたいだ。心を弾ませる私と微笑む母を見て、彼はきれいな礼の姿勢をとる。

「ジュード、ちょうどよかったわ！ お母様から良いお話を聞けたから、清々しい気持ちで外を歩きたい気分だったの！ 手が空いているなら、付き合ってくれないかしら？」

「……僕は構わないけど」

どこか硬い表情を浮かべる彼は、ちら、と母の様子を窺う。

母は気にした様子もなく笑ったまま、行つてらっしゃいと手をふつて送り出してくれた。

「びつくりよね。あんなに細いお母様のお腹に赤ちゃんがいるなんて！ ジュードは知ってた？」

「え、赤ちゃん……？ いや、初耳だよ。そうか、それで最近騒がしかったのか」

のんびりと歩み出た中庭は、今日も敏腕庭師によつて整えられている。昨日よりも美しく見えるのは、良いニュースを聞いたからかもしれない。

うきうきと弾んだ気分ですく私だけど、ジュードはどこか困惑した様子だ。

「なんだかジュードは元気がないわね。何かあったの？」

「何かあったというわけではないよ。それに、これは僕が口を出してはいけないことだろうし」

一応訊ねてみたものの、ジュードからは曖昧な答えしか返ってこない。先の暗殺者退治から、どうにも彼は落ち込んだままだ。あれ、やっぱり重要なイベントだったのかしら。

「ねえ、私何かしちやったんじゃないの？ それなら遠慮なく言つてよ？」

「アンジェラに何をされても、僕は平気だよ。そうじゃなくて……」

年の割に妙に艶めいた表情を浮かべる彼は、何かを言いかけて、また口をつぐむ。

一体なんなんだ。うじうじするなんて男らしくないぞ！

「何よ、家族が増えるのは良いことじゃない？」

「それはそうだけど……君は女の子だからね」

なんとなくじめつとしたジュードの雰囲気、返す声がついキツくなってしまう。私の不機嫌になつてきたとわかつたのか、彼は黒い瞳を少しだけ揺らしてから、寂しそうに微笑んだ。

「何があつても、僕はアンジェラの味方だよ。これから先もずっと、ずっと」

(そりゃ、敵にはならないでしょうけど)

ずっと味方であると先に言つたのは私だし、その気持ちを返してくれるのは嬉しい。けど、子ども同士の会話にしては雰囲気重すぎるわ。彼は何が言いたいのか？

「あー……もうっ！」

これ以上暗い雰囲気ではたたくなくて、彼を突き放すように走り出す。まあ、私が走ったところで、すぐに追いつかれてしまうんだけど。

彼のこの日の態度は、その後もしこりのように私の胸に残り続けることになる。

——そして、それから数ヶ月後。

生まれた第二子は『弟』で、家督を継ぐべき『男』で、私は大事な一人娘ではなくなる。

家族を愛し、守ると決めて、類稀な才能を見せてしまった私は、弟の誕生によって、人生の大きな転機を迎えることになるのだった。

\* \* \*

『聖女』とは、誰が決めるものなのだろうか。私にとってはゲームのアンジェラを指す代名詞だけど、本来は宗教などにおいて重要な役目を果たした女性を賞賛する呼称だ。

ゲームのアンジェラ・ローズヴェルトは、スタートの時点ですでに『聖女』と呼ばれていた。

対して今の私は、まだそう呼ばれてはいない。神聖魔術を使いこなし、神様から多くの加護をもたらしている私には、あと何が足りないのだろう。

——その答えを知ったのは、八歳の誕生日を間近に控えたある日のことだった。

「ここは、ずいぶん大きな教会ですね」

両親に行き先を告げずに連れてこられたのは、我がハイクラウズ伯爵領内で一番大きな神聖教会の施設。しかし、黒い修道服の男性二人に案内された場所は、礼拝堂のほうではなく、彼らの宿舎だった。

清貧を良しとする聖職者らしい、華やかさとは縁のなくすんだ木造の建物。造りだけはしっかりしている宿舎の三階には——何故か私の部屋が用意されていた。

「私の部屋？ それは、一体どういう……」

「可愛いアンジェラ。貴女はね、今日から『神様の子』になるのよ」

両親から誇らしげに告げられたその言葉で、幼い私は気付いてしまった。

——ああ、私は両親に“捨てられた”のだと。

(……こうなることは、頭のどこかでわかっていたはずなのにね)

木目のある大きなベッドにごろんと横になる。今まで住んでいた屋敷と比べれば質は劣るけど、こうした宿舎で用意されるものの中では最上級の部屋だろう。

広さも体感で十畳近くあり、幼い少女に与えられた個室にしては大きすぎる。今までの寄付の額

も相当だったのだろうけど、それにしたって破格の待遇だ。

……両親は、私をこの広い部屋に置いて帰ってしまった。

つまり私は、『伯爵家よりも教会にすることが相応しい』と思われる、教会側にもそう認められたということ。

—— 神聖教会の広告塔たる『聖女』となるために。

(私に足りなかったものは、これだったのね)

ただの伯爵令嬢が聖女なんて呼ばれるわけがない。屋敷から出て教会で暮らすことが鍵だったのだ。

ここで修練に励み、聖女として認められてこそ、アンジェラはあの部隊に選ばれる。もしゲームと同じなら、近い将来魔物によって危機を迎える世界を救うために。

そうだ、両親は正しい選択をしてくれたのだ。おかげで私は、お嬢様としての教養などをかなぐり捨てて、ただ強くなることだけに集中できる。

—— そう、わかっているのに。

「……っ！」

ぼろぼろと目からこぼれる涙が止まらない。自分で思っていたよりも、私の心は七歳という体の年齢に引つ張られていたらしい。

敬虔すぎる両親にちよっと思うところはあった。過保護な使用人を面倒くさいとも思っていた。

それでも私は、彼らが嫌いではなかった。毎日顔を合わせることが当たり前の、幸せな生活だった。生まれたばかりの弟のことも、もちろん嫌いではない。赤ちゃんの小ささと柔らかさに感動したり、愛しかった。彼らを守るために、これから強くなりたかったのに。

「……覚悟が、甘かったかしらね」

ゲームの主人公は悲惨な過去を背負っていることが多い。家族との死別などは、もうお約束みたいなものだ。屋敷から離れただけの私なんて、ずいぶん甘いほうだろう。たとえ、もう家族のもとへ帰れないとしても、彼らは生きていてくれるのだから。

それでもやはり、涙は後から後から溢れてくる。私は、彼らと離れたくなかったのだ。

止まらないそれを、無理矢理手のひらで押さえつけようとして——

「……こすったら駄目だよ、傷になるから」

「……うえ？」

ここで聞くはずのない声に、固まってしまった。

「ジュード……?」

いつの間にか橙色に染まった陽光を受けて微笑んでいるのは、もはや見慣れた私の幼馴染。いつも着ていた使用人服よりもいくらかラフなシャツとパンツ姿の彼は、相変わらず年齢には不相応に落ち着いた様子で私の頭を撫でてくれる。

その温かさ、私のより少しだけ大きな手も、間違はなく彼のものだ。寂しさが見せた幻じゃ